朝夷巡嶋記

初輯

三

へ13
704
3

門 蹄 704 巻 3

明治三十六年十月九日購求

朝夷巡嶋記全傳巻之三

東都 曲亭主人編輯

初輯第五

絲の紊れの幡太薄
催死を秋の蟄居

痛しいろる範頼朝臣八一生涯の大厄難この日小逼りて釜中の魚屠所の羊となるよ弐些もひろけるとど時政が好意ゆて鎌倉殿の御疑念釋稍恩免のお使をもつてけりとどひとりて老臣ホが諫を聽ぎ生平よるもいと華やかに後者さへよ裝しく営中へ赴れるへが時政が壻なりける稲毛三郎重成兵士駕後へて。若宮巷路ゆ出迎へ矢庭ゆ蒲殿主従を歩ゝと推とり竜鶴倉殿の御館伊豆の修善寺へ入れ一と重成仰ゆ兼ゆ

とのゆ待ゝ久ゝ誘ゆへ。といそぶせ八範頼ゆ対ゆ申ゝ逆

心ゆ。何のかはらし掠めく再度のち、咎を蒙りけん。とふもかくゆも推案
さらく。ち、疑ひをまうし解べ。枉く途式ふ死ひへ風死いへ。といと忙さる
声ざるゆく。り返しく勸解べ、稲毛三郎冷笑ひ重成かくいへべく
うる先へ一歩も放ーまゆとべうもあらざさても血の導言ふといと
いうめーく窘る式蒲殿ハるの辭を盡しく和解んとあふ招み遥後ゆ
た成大夫属重能ハ遠ーく進こよるまく主の袂を引動ーあるべーとハ廣
通ホ豫てより覚せーるもこの期ゆ及びて百千遍陳ドるハ由なる死ホ
彩欲所詮嚴命ゆ隨ふく。さより更ホ修吾寺へ赴せるべ何式りく
遥遠るの死ホ方寸を明ーるん兄只沸運のまるとてそひまゆへと密
ゆホ練まべ蒲殿頻ゆ嗟嘆ーく遂ゆゆこび爭ひるハど當下稲毛三郎ま
兵士ホを促ーく早せまる張輿へ蛇頼朝臣を後ーませくく行ゆと

いそぐ立まべ蒲殿の後者ホハ果まく せんまべ老べ皆この如ホ抑留
せらまく主君の俱ゆさうとるるべ。そぶ中ホ重能ホ老堂十石堂六七人主の
先途式ゆるとるるべ。さふく腰式切らんとハ彼必死の面魂悔ま
かくやいひ名。重成僅ゆとまる式行ーく。輿の後方ゆ立せるまま現人間ハ
栄枯得失今ホさぶぬるるのぐ。きのハ幕下の連枝とく車馬門前ゆ
市式るハ左獄倉の大小名愛敬渇仰せざるもなくけハ美里の囚役と。
なるまもさぶまハ恩顧のものも憂式共ゆまを居ゆ稀ホく親ー死武者ゆ
えへらぶ。袷といひ袷といひ敷死真蘇枋の繁芒尾花ぶ袖ゆあく家の。
乾く隙るの死妖の天かゆり果る族宿ーく。足柄越ゆその夜ゆ明ー。次乃
日の夕ゆえて修善寺へ着ハ。ゆ入ーゆ宿ホ濱の宿へ別ゆ持く式
向ぶまく北條時政の内室牧の方ゆ後者なる刀野傳杖照時二百餘騎を引

率ゐくるその夜亥中の比及ぶ歩と推よせて。蒲殿の夫人と白旗丸を捕ろの逃げぞ。
進めくと令まもるべ。早雄の武者四五十騎閧を哨とつつまく。前門乃橋うち
ぶこしくたや迫入とんと闘ふもかるべーとハ豫ようもいて人殺し館の老嘗橋
太充衛門尉高保。梓治部柔右友ハ前後の門戸をさー固めて雑兵を罵
激。矢種を惜びさー。浩雪浩散ゑ射防猶ふ隊戎ぞちの多くく進る寄
ふの兵士五六人橋のろうぶふ射さふ。さふもくもこども大勢ハ。射方乃死
殿を踏踰さく。透間もなく競ひかる戎ろのは入ぞさてーと。防戦ハ高保も有
友も大剛のりのなつをけまべ。さうなくハ破ぶまべ。若ハ有ぞこども館ろる兵
士ホハ素肌之物具。さる隙ろの死ふ。あぶ孫と高保ホ。ち後ろるぞ。対応の軍ハ
要甚べ蒲殿逆意ゆーやさぐ。さてふの死罪戎ろるハふとも。今ケそあれのち
のちゆハ黒白ハ考ふぞなん。さまべとく。俺们留ふ有ろぶ。生命戎受

ぶーく。夫人孺君を遠ふんや。弓箭とろる男のろうひとく。ん使を阻ふ已ふ戎
沼ざろん。かまべ今霄の戦ひふ皆物の具戎ぞべくまどこまぞ。是ろ主後ふ固
ふうぞ。ふ意ろのとり戎死後ホ考ふ。ん為ろるろぞ。ふの君所ホゆふ。蒲殿の外
主君ハろーハ。ろうぞ死やとく。隈ろの。渝ー激ーまべ志乱ろのハ義を
金石ろう重ーと命。鴻毛ふハ軽ーとーく素肌ろれども。矢石をおそまぞ。
號叫さ戦ハども如法闇夜のろたのまべ溝をろ。塀を乗る寄ふ法覚ふ
御ぞろ。ふく。ふの数を考べ敵ハさも乱ぞ入ぞ。彼此ふ火を放ろふ秋の
夜風の烈ーて猛火煽ふ焼揚ぞハ奥ちる婦幼ぞ煙ホ呼て叫ぶ声所鳧集熟ふ
異ろ。どそのとぞ橋太左衛門ハ雑兵ホ防矢射さぞく。燈の下を潜りぞ。
後堂へ走りゆぞく。孺君をろるなれば白旗丸ハうえさせろぞ其ぞう彼ぬ。
とかくろ。遠ろホ治部柔もとまぞホ等ーく。数ケ所の深庚を負ちぶ。玲の

間のほとりの木〻橋太左衛門遠ゆえく治部のぶやと
左衛門和歌の孺君のもん往方を尋ねさせ否孺君のもとなくば幡太の方も
ゆくへまきぶといへども有友さまぶとよ侍女ども多勢向ハ曩の中あやしき武士一人夫
人を小腰に抱へて走り去らんとせ侍ればもれ側に侍りし侍専女小唐後女の
童命限りの禁ハ件の辭者些も驚ぶこれハ安達盛長ぬし！孫倉殿に
密かに孺君受取ひく幡太の方を迎ひ奪ひ去ると聞くもあくまで辺づく
りの残疏ちらしく外面へ走去ると告げ知らせて孺君ハいかゞぞ。
と問ども去ぬ後ぬ絶てるの〻といへども高保うち驚き安達氏ハ夫人のもん親家
ろ見ぶさとおやとなん孺君さへ奪れてハ死しても不覚の罪ハ免ぶ敵内
外に充満く剛猛火の色ぶてれば蔵〻ゆるくとべうとあくまで偏に夫人孺君の
自殺を勧めたれ死生二途のもん倶残せんとく急〻甲斐なく。この後に

走りたる人死人今一ト戦懸散〻くもん往方を尋ぶやと思ぶ有友いかゆや及
ぶと走て出んとせ侍両個ぶ間へ屋蔵ぶと蔵る長押を薙刀もて受て
倒せば裳と散る火花に似る巣武者ども烟の中ぬ乱れ入ぶ戦んとせを
高保有友左右ぬ受ぶ〻両人齊一閃せ刃の下ぬ彼軍兵ぬ首ハ花ぐ
磯と蔵ひとの烈〻たる大刀風に火気煽ぶ〻ハかちぬ〻と寄ぬの
軍兵処成行らぬと追蔵ぶ前面ぬ蔵る梁ぬ治部ぬ蔵ぶ肩をうて半
身既に焼烟に枝起さんとせ侍高保ハ養子に足成喘おとく火焔の中ぬ
磯と坐〻あら朽ぶ〻や無念やと延に声ハかりせども喉切る隙もあらばこそ。
あらぶ一世の功名ぬ夢のもくへと立の昇る。見や長安三月の煙を感む両老
黨ハ数奇成盡せ〻大厦とぬ灰燼となるまく失ぬけぶかるぶ〻沼に対
ぬの大将刀野備杖照時ハ廣庭に馬を乗きえ兵士ぬに令をろ打。敵とぬ

伊庭柳九郎あつ忠

つれづれと躬方のあらねいとあやしげろる、武者一人、蒲團を居女房を小腋に
楚と抱へ、奥より走り出で、びやつ矢庭の遊り留させこの来歴を尋ねば彼
武者驚ぐ気色なる。これは安達藤九郎盛長が家隷の伊庭捌九郎敦俊と
いふものぞ。蒲殿のもんうへは今更よいふ及ばざる夫人幡太の前は則主人
の愛女、白鳩丸は外孫なれども、かくもしくこの西母子の命を生でやとて功かえ
所領なかえ只管歎ぎ、せうせーこが鎌倉殿聞食勇士も老ては恩愛乃奴と
なるる歟あはれ、但白鳩丸は頼朝が仇となるべきなれば助命の上、母は
うけ、そが母は仔細なし。照時が旨を伝へよとて赦免状をぬかれ、よりて
某この係は火急の使者をうけ、はは駿馬が鞭を鳴らしくこゝに賞所へ
馳参じ合戦の最中なれば街道の超出居なれとくく避させば
過失あらんとやくべ躍くく潜入り辛しく夫人を救ひ出まゐらせんと述

給へ。衣領を掛さる。赦免状をとり出だし。遽ぎんとまる程に照時は馬より下
りて恭しく拝受なんかくて何ぞ疑べ。更聞さるる和郎一人倶しまゐら
せんは心ならば兵士ほしく送らせんとくべ敦俊彼状揮合戦勝利さるとも
いへども宗徒の武士ほ縁伏せずと去る程に今軍兵をこゝにぬらんとまゐ
ぬ。某はとまゐひとも。こゝでぬるひべ。と推辞てなべく夫人は倶しまゐ
らんといへども世は幡太の方は泣沈て。意ぶ思しまゐ。所夫は後生子は別れて
形ちの死世は只いとまを存命るとも何ゆるせんそまゐ親のけとろは隨ふ色
ことめでよ。只この侭は乗ていね猛火は焼き果ゆると聞召なば却させる
給はあらじうといひあへぬ又泣あへば。敦俊声を激しく練ん賜へんとまゐ
へども扶起しく遽しく外面へ倶しまゐ照時は是を送らんとく眠
近死兵士の三式拝く門前まで立出でく一町あまりまゐ迄しく弓は益前刻

弯固め弦音高く弾と射る矢坪違ぎ敦俊ハ七九の命絶えんかくまでか。
激皎く串れ苦し、声叫びあげうつ俯か仆まけ是照時ぐ兵士ハ是七絶
ゑるさまん。一人大刀を振翳しく。驀地又走り出て。驚刺こ人人を多ふ。
幡太の方を捉く推伏ち頸戎ゑ死砕く。立あがらんとする処絶覆面ゑる
一個ゑ武士並樹の蔭より走り出て。肉を大刀風ゑ彼軍兵ぐ頸ぐち落し。幡太
の方れん頭ゑ共頭髻短ゑ引提て。跡絶暗し逃亡う。照時ハ是絶ん。
彼脱ゑ主後四五人透間もなく追蒐ゑ。如法夜ゑれば竟ハ
及ぶ幡太の方と敦俊ぐ死骸を竊かに隠させこの夕努く沙汰をゑ。
兵士ハ密語く。又門内へ引かゑ照時ぐ。ゑ眠辺兵士ゑ
で。ゑるゑ絶てなゑ是けり。かくて高保有友ハ宗徒の武士ゑ討死し。婦
幼ハ煙ゑ呑び火ゑ焼ゑて死ゑ所ゑ。ゑそでくそとゑ絶ゑくぐ辛して

脱ゑてハ雑兵ハゑ稀ゑ。さ所絶ゑ。刀野傑伏照時ハ是ハ軍兵を部して。
白鳩丸を徒索ゑ。猛火ハ焼ゑ。ひゑん。この絶より落ゑ。ゑ所ゑ墳ぐハ
ゑえざゑ。ハ焼ゑ。ゑ火を滅さゑく。鰍果ゑ亡骸絶此彼と展捜しく。
橋太左衛門治部恩ハ宗徒の武士の首級絶賞し。勝関三さ人揚さして営
中へ急所絶ゑ天ハゑめぐと明ゑけ是。業下某生再視範頼朝臣ハ。ひし
かけゑく。又さゑハ。後岩寺へ閉居。是日影まゑ。ち所後の方を置ゑ。ゑ所
なの絶めゑゑ稲毛三郎重成ハその日ゑ是。鞍兵ハゑく。前後の門絶固さ世。
庫裡ゑ大客殿さ人問ゑ。時なくゑ。ち巡ゑ。さゑも名さ所墳仏場ゑ只
被地獄ゑ異ゑ。ぐ大夫属重能ハ近習の侍ゑ絶ゑ。ゑ絶ゑ。ゑ絶
閑絶ゑ慰ハゑ。ゑかゑゑハ主後憂苦ゑ日ゑ。ゑ孫ゑ。五六日を
経所絶ゑ。有一夕更衣人定りゑく。客殿の壇絶乗絶さなゑ人潜ぐゑゑめ

あるを滿殿は重能と夫人のうへ孺君のうへ。三人うんかくやあらんとうち
續ひしかとも此月廿日あまり。皎こう屋の月濃ろの照
らと紙窓に立在し人の影さす紙重能は結とうくそれ何人ぞと問れば。
否れつるのみあらじと密やかに回答く。右ゆかりの松戸とそと開く。
身を横ざまに裡面に入る紙。とうまとび見別人ゆゑ江義人廣通。狼狽へ
いと寥そく。脅負まれる袱包重ねなる紙解おろ〳〵。ちんまへめど踏居る。
ゆひげなる対面ゆ絶頼い懸〳〵。膝の進む紙光ゆゑ義人善ゆゑ。
白橋丸いろゆそや。衛る人の隙ゆ。重能も手を
こそめん留ゆ高保有友ちん俱ゆ和殿と某豫く定めゆ居る。
和殿は後見く糸ゆさゆ。さく後ゆぞく。ひ光とのは廣通ちゆ忘れる。
わゆは恩義ゆ負ゆく。外ゆや走るとゆ。某かの日私宅ゆかへりく。

徘徊とてのくんとゆ居徊。ゆゆ君は出させゆひは途ゆて笑び後ゆ若寺へ逃世
ゆゆとゆつぶいく追ゆ。ちんと只管ゆ走ゆども。幾里ゆ行ゆ日ゆ
くれゆ。かくて夜中の比及ゆ町屋川の岸とりゆく。遥ゆ後方とゆ人ゆ夜の
宿のくゆ當りく。火気忽地ゆ天ゆ衝。縁倉へとて走るゆの猶ゆ正〳〵兵
火そと罵ゆと大ゆくなゆくゆとゆひあゆとゆ居ゆあゆ其紛ゆ。ゆゆく引
ゆ。せゆ茶ゆ違ゆど館へゆ刀野傳伏照時を大ゆゆく軍兵騒〳〵ゆゆ。
橋太左衛門治部恐ゆ要時ゆ防戦ひ〳〵ゆ。火攻せ〳〵ゆく竟ゆかゆゆどゆゆ
悉対死せゆ事果る比某ゆゆく走り逃〳〵ゆゆ捨べ命ゆゆゆゆゆゆと
ゆひゆ〳〵く裡ゆゆ入ゆど不思議ゆ獲ゆるゆのゆゆゆゆゆ藤澤ゆゆ退ゆく。世
の風聞ゆ竊ゆゆゆゆゆ當麻太郎武弘ゆ營中ゆく殺れゆ。この友ゆとゆ恩隠
謀分明ゆゆと沙汰せゆゆて。ちん身のうへゆ及べ結ゆ又奥ゆゆゆのゆ孺君ゆ。

又武弘が為体さらにあまりかゝ猶近ゝ見るべき奥率かゝ述ぶ上侍寝所ゆく告
たまふらん。明日八鎌倉より。使使入来の由はあれば宿期のあん供せまゐらゝくて。
今朝より寺門式能細ゝ。夜の海陸まく衛門人の隙式ゆくくやすり式と平頁小
告やうせべ蒲殿八仏の毎日果日果てく嘆息ゝ。重能八廣通ゞ先見智計式嘆
賞ゝ。當麻太郎を罵るのゝ又せんとべ由なるとけり。かくくそゝ結豆稲毛
三郎が果兵ふ八範頼朝臣の近臣の一人増る式ゝく驚式矢庭ゝ流
人廣通式引出さんとゝ日廣通八些も動ゞ某ゝ八鎌倉殿ゝ。さ所
りのあるとと知召。江義人廣通なり。主の家期の供をせんとゝく。そるゞと茶
ゝる式不光ゝ入ゝく今夜ゝ阻んとゝ居るやあるゝゝと云ゞ来つ居
とゝた。ゝどく寺内へ入れゝそ。ゝゝゝとゝゞ各位も怠慢の罪脱ゝゞと
けん。さても脱ゝ路あるゝ。と問給れゝく理ゝ給覚ゞ。この一人増ゝ

とも何程のゝあゝん色を咲ゝく無式求んゝ貝ゝ捨ゝちけやとて皆
咲ゝ退ゝ式その旦當寺の住持八常ゝ叮嚀ゝ蒲殿主役式管待てゝゞ
ゝ蟄居の憂苦を慰ゝ。今日八鎌倉より使来海あるべゝ
躁くその沙汰ひゝ。ゝ籠りくのゝ在せゝゞ垢つゝく付ゝ焦悴させ
ゝひゝけゝん浴ゝ。知召ゝゞく。當寺の温泉八萬病一治ゝゝ山門
の前ゝ川の真中ゝ湧出る式独鈷の湯と仏做せり。もゝ高野ゝ大師當
國ゝ参縁のゝゝ。この地の温暖なゝ式ゝく國民ゝゝ温毒ゝ於ゝ式
情て奥の岩窟ゝ引籠り。加持ゝゝ八七日七夜食ゝ居独鈷を投ゝ八
この山川ゝ發ゝ為ゝ。其処ゝ温泉湧出ゝ。その後里人石をゝく大
ゝゝ独鈷式造りん件の温泉のほとゝゝ立ゝく云云と名けゝり。偏ゝ大師の
大功徳を仰ゝとゝゝ加以川の上下処ゝゝ出る湯あゝゝ石を置て湯

桁とせ。細小なりとも人浴ざれバ牛馬の足を洗ふ。今なほ土地に益ある
ことハ人のしるところなれバ牛馬六畜疵を蒙ふ。大師の恩徳莫大也。現に
足を浸して試るに間僅に三四寸。外面ハ冷水也。其処より内ハ温湯也。不思議の
ことにハあらずや。当国なる熱海の温泉ハ朝夕に時を定めて海潮の中より
涌出るゆゑに。熱海と名づけたり。唐土雞籠山洞中の潮泉粗これに似たりとぞ。
又江乗県より出る湯泉ハ半冷半熱しといふなれども我独沽の湯ハ数に
あらずと覚ゆと精細に誇せらる。範頼朝臣うちゑみて。現逝のと流る
水ハ夜となく日となくかへるところ。又彼泉の温なると冷なるハ生死に似
たり。吾のみならず範頼が冷泉に入る時なるべし。禍神の祟にや身の濡衣と
乾あへぬハその死後まで恨ある事なれども仏縁ありて霊場に終を取らせる
こそもの幸といふべき身なれバ。不二法門の不可思議なる。今にちぢめねる

その身の憂となるハ苦しさも八しかはあれいよいよ恭しく先づさしあたりのたぐ結びて
ゆゑんかりいへバ一蓮托生の引接を憑むものハ他ならずもなくはいと正首に回答
する。光期ハ辞にあらねバいとも哀れに覚えしが住持ハつよく叮嚀に
一念即身即仏の功力を勧めあへなく其秋の日影の短くて未だあけも下向比
旋使入来とよび続声に外面俄頃にさわぎ立稲毛が家臣に案内させて
諸侍のうちハ狩野介祐茂宇佐美三郎茂光なり。間毎にて先を追ふそれ
客殿に進み入り。頭人稲毛三郎ハ外面をまもるなるべし。そのとき蒲殿ハ礼
服を整へ恭しく出迎遠路の旋使俄頃の来臨なん疑ひも家りて閑居され
ことなれバ数待もさまうに任せバ幕下ハいかく恙なくおはしますやと問せ
らるに祐茂ハ大紋の袖を合せ旋意の趣恐けれバ私の回答ハまうさず。抑此度
吾們両人なん使を承りて発向せしハ別義にあらずといひて範頼席を更め。

又弐郎を低めべば祐茂は茂光が会釈しく小膳弐進み、淀意のおもむき別
武ふあるを参州まこの母ども逆謀の企ども
又年来の軍功あるべば明く地が虚実弐正してふくその非弐外ならざるべど只
後弐弐懲んなる対面をのく弁さるべ逆心まるく己とれなく家臣
當麻太郎をもく幕下を害しなんと飽まぐ伎倆るるを蔑弐て當麻は
即座が殊ぞ居勿論その夜の為体當麻は浅痍を負しべば脱れかるとゝひ
けんそぐあて自殺しくるべば渠口つら主の悪戯を白状たるがあら祝ども
渠が帯さる七首は伽羅丸と名付さる参州の重宝さり原こるべ又左典厩
朝さるべ相傳の名刀なるべば幕下も怒りてとうしまた拾といひ恰といひ向ぎて
参州の逆謀既に明白さるとり是をもぶべくは何弐りく天下が示ん王
事監とるべ公道が親疎あらんやとの故に濱の宿の第へ対る武士を

らるるべく宗後の老堂みな対るべとるがよるべく曩る囚教を行さるべる。
宝飯の城地を召放べ彼七首を返しかさる。ちん是弐ひへるべと言葉なく述べり。
當下宇佐美代弐は携乃来るる白木の笘より。彼伽羅丸をとり出しべる左
右を信とるべるべば稲毛が家臣がさるべる足打の三方が件の刀をもち載
つ。蒲殿へぞるべるべるべる時は左ひの腰障子をちくく上推開べる江瀧口
藏人廣通大夫属重能が老堂若堂をべるべる七人みな礼服を装べて床よ
並てをり。両侯はるべ弐るべるべ何めなるべるべ。と外るべるべるべるべるべ
弐低るべるべ参州恩顧のなが江瀧人廣通大夫属重能破見十郎員
幸名栗節平元廣矢刎二郎景氏五十良小三大季宗菊川番作良忠が
主君の先途ありとなく推参しくひべ。黄泉乃供をせまるべくく。
ほとり迫く祗候せるべ。ん宮べ弐蒙らんといべば祐茂べち点検現参州を

怪善寺は
範頼
死を賜ふ

幕下の連枝一人四の受領なりしかばその罪あるといへども死を免ぜらるべきやうなれども三郎殿のこの式何ぞ出ひ給ふべきと同じく茂光沈吟して云ふ様某も豫く覚期をせざりしとの後難を憚るべく若しぬかるべきかと彼ホを通く結ばしめ給ふといふ声伝へて廣通ホ赤色と変じ。おそれなく席式をつとめて。主の左右に居るべきなり。かつて彼ハ彼伽羅丸の匕首を左ひかとまさに。うちかへして右ひかとり。この期ホ及びて家ぞりもヤ引くべ死よりハあら絶と家臣當麻武弘が営中へ来至しつゆハ範頼終ことに式ぞ。但件の武弘ハ執権の家臣なる某甲ホ所縁あり。これらホ就こうち勲功恩免の沙汰ありやなしや。密ホ問ぜんといひしかば。その縁に任せしかば又この伽羅丸の匕首ハ聊賞まるよしあつて當麻太郎ホ。せしかば。さて綽の證据となるべく。欲さるところ範頼が逆謀ホ決らぬ素なり

不忠式存ぜぬ。反逆の汚名式獲なり。是只過世の悪報ぞうち歎くゆゑにあまりはあるに両使ハ何とぞホ申ん。云範頼が人のこころ鎌倉殿の不幸ぞ。義経といひ五侍といひ順逆定なるべしく忽地に戮せらるる分みづから枝を伐又その翼式断るべく。誰か亦ホ子孫の打城となりて寇を禦ん。情りの弦案さとるに祖父判官殿のとき家宝の太刀の名を更めて友切と世に号し故証保元の播乱ホ父子兄弟戦ひ給ひしかば。亡兄源太の命ハ叔父帯刀先生賢の命ひぬ。この後平治の兵乱ホハ頼政卿より平家に属て一族の義と顧ず文治ホ義経討ぜ。今茲ハ範頼死を賜へり。翌ハ又誰がうへぞ。一家の良ハ絶べきに。先祖の失ハ論ずべきに。範頼実に野心なし。その罪ホあらざるべく管叔の四訓式頼るべきを。ものとハ云ふなれども。子孫の打城を要ひ給ふ逆臣ときく隙を窺ひ。幕下百年の後に至べきに諸呂の禍あらん五侍兵子皆ぞ才ある人ぞ。この死

後までも東門に服紙掛くるとて、あらぬ様に先霊誠を監ずる。不埒と報ずと
咎めなく幕下の子孫とて寺に終焉とるべきのみにせん。悲しきかな。
靭負立居七首を覬ぶ。鬱憤乱を見まうの鳥の死ん
とするとて死ぬ。その鳴とのとろろ〳〵。人の死んとするとて死ぬ。そのいとよりも
なんとの君先見あるふあらば。最期の金言果せるべきを。是より十有二年
経て。元文元年秋七月十八日のころとよ。幕下の嫡男頼家朝臣入棺北條が
奪れてこの修善寺へ推参竜ら浴室の中にて雪せらる。輪田応報おそるべし。
同結休題。且〳〵範頼入道祐茂ホ打ち対ひ〳〵。死導言今さらに命を
惜しむのとやいらんそのとまるとかくもあるべき。家臣江藤
人が不思議なるさるのあるなれそ。鎌倉へ進ずせんやとありけるとて切るべ。
さやとてもうちつけゆへ憚あるべ。豫さより。當寺の住持に委ねおれ鎌倉へ齎

さるべく。披露〳〵く賜ひ給と他ものもるべく宜へば祐茂茂光ら共ホそれへいらなる
物なるやいひ出まくがさるべとも。當寺より進らまるべとて。何ぞ厭ん
ところなくいと悪まるせがうち点賦そべ。使ん安堵とり。両使ん
いひあへど白丝垢の袷の襟戒推内ば二ッ三ッよろ祖ばく。衣ものと白丝膚をあら
ひ。彼七首をうち戴き刀を袖ホ巻そそく。永ものと刀尖を左の肚へぐさと
立小膝戒衝く右のくく一文字ホ引めへば鮮血さっと漬りく雪と欺く白夜衣へ
飾磨の紅褪と染ものせり。後ものへせばと廣通重能刀を逆ホ抜ちて腹
かば切ものと介ば稽ものと。後見員半名栗元廣矢刈菊川五十良子季宗腹十文字ホ
切るものあるべ或ハ赤刺ちぐべ刺ちぐべそぐ臥累ば主従八人算を乱〳〵。屍も
秋乗の霜ホ散〳〵死血ハ赤野逕の花ホ似〳〵。三寸息絶ものハ萬事休ものと旅魂
今夜いらるべの宿ホ入らんとぞ哀れ〳〵。祐茂茂光ホ蒲殿の

ちん顱頭、このつまく稲毛重成のこともの鎌倉へかへる程の住持へ件の送物を齎しく使ひ跟尾して来りゆくり。若し実検の義ゆ及ばまじ首級を寺へかへさせのひとく主従の亡骸式葬ら世のひろ是よりさ死ゆ祐茂ゆ絶命自殺の為体と鎌倉勢へ伝えあげ。修善寺より進らせこる件の送物をつん十年間この上死幕下の左右ゆ稲毛三郎重成安達藤九郎盛長結城七郎朝光海野太郎幸氏ろん候ひる。頼朝卿ゆ委細ゆ縛の数式角石く彼送物を開き見ゆ二尺あまりなる白木の櫃ろるる蓋ハ釘式ゆく打ち付て八方ゆ封度式付さり。就く海野幸氏しく。披して御覧さるゆ夾服紗ゆ包まるのと一通の書翰あるとけるこのあづ包ミこの物式とく。服紗を解しくるへば年三十ばかりなる女と共ハ九歳とおぼし死男の生頭ふたつ輾出ぶ。皆ひぶけるとなるまで衆皆呆まて目を睜り。あく口を鉗さとり。さるとけども幕下ゆ驚死こる気色もなく。その状続めと賞へ結城朝光うけ見ゆつまく声高ゆふ続ゆどゆ主従耳を側く。

齊一と式うちゆバ

範頼謹白。昨尊命反覆。見譴干豆修善寺。今又両使到来賜了。属婁臣非其罪。被莫大之釁。

幕下責臣以武弘狼藉。臣何為知之。雖不知。疑似不能辯。以貝錦成章之深也。願武弘呼為似児戯。雖至愚。必有縁故。奚速令捕之。而不拷其詭秘。問其来歴。先者不甦。罪歸乎一人。固非公道。灰聞。臣踰足柄之日。幕下使刀野照時焼濱驛。第。荊婦父安達盛

長。聞之不堪哀悼。造於營而乞命。
幕下辱賜書。以赦荊婦。盛長則使私平伊庭
敦俊。傳赦於照時。照時聽命。不能阻之竊
殺荊婦與敦俊。嫁之于兵火是夕家臣江廣
通者。不圖而與此抵觸。復怨於其後者。而奪
去荊婦頭顱。携来而告臣。於是乎肇知。危臣
者蓋照時之徒也。然而私臆不敢處。獻其首
二級。以乞鈐裁。一則荊婦首級也。一則照時
私率殺荊婦者。不知其姓名。
幕下裂然高斷。鋤奸解寃。臣死且不朽。古語
有之。叢蘭欲靜。秋風動之。賢君欲明。讒間蔽
之。悲乎哉。三致虎於市。則人人必信焉。告曾
参殺人。其母竟投杼。臣冨附驥之功。乞杜患
之備。狡兎已盡。良犬就烹。不及者亦如此。臣
臨終。不知所告訴。緘怨以遺託。端流憲覽
不愆宰甚。

建久四年癸丑秋八月　源範頼再拜

とぞ続くる。現続むりのも笑めの。悲歎くく面をあらく。笑ど嗟嘆
御従のでく。その夜さり御教書式齎くく遣くく。敦俊さんの火の焼まく死。
と人もいん我もちひく。けつまづくいひく。御従に違くく幡太の前と敦俊を
害くく。照時さんの底測ぐくひと発式舎く回答きうせば。うち点ぐくひく。
あの藤九郎いくのぞと。向せ見べ盛長い席式避く頼式つ死愚意も誠に
ぢぐくくる。頼朝卿へつぐくと聞ぐく眉を聳め。あくさくろ泣ねくもぞ

さるべとよそのゝ照時がいひつるハ闘戦既に勝利ゝ。ちや火を放くい比安達が使走ゝ。御教書ゝ流遣せ〜ゝ幡太の前を救ん

るゝかゝのふべくもいとど焼落て後嚴ゝ。雲ゝとゝ出せんど。

と諭せど彼使者ハ一切とき聞うけ引ど彼夫人を救んとて。

煙を犯し。猛火ゝ後堂へといやくわどゝ果〜ゝく焼亡いひゝと実〜ゝゝ告〜ゝゝ汝ゝも云〜ゝと指示せ〜ゝ。

奇怪のゝ照時ゝ召よせよと。舞せ〜ゝいたまた

ゝゝ稲毛三郎うけまりく遠侍へ退出ゝ。

初輯第六

截落せ刀野命

汝ゝ返る湯嶋檜

稲毛三郎重成が妻ハ頼朝卿の北の方政子の妹ゝりけれ。

時政が為ゝ女婿ゝ。ゝ裕とゝひ恰といひ勢利ゝ。

めゝ青雲の楷桜ゝ。ゝ志念ゝ運ぶゝ。ゝ巣が

虎の威を藉ゝ。ゝ無礼とゝるゝゝゝ。

さるべ稲毛三郎ハ幕下の乳母平なゝ。刀野傅杖

照時を召せとゝ御使ゝ。遠侍へ退

ゝ。固ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ隨御使の類ゝ照時へ

告ゝ。ゝの條の類ゝ密ゝ書ゝ。ゝ腹心の私率〜ゝ時政

ゝゝ告ゝゝ。ゝ北條時政ハ女婿の稲毛ゝ密書とゝ。

忽ゝゝ。ゝ内室牧の方ゝ如此ゝ。ゝ耳語ゝ

牧の方ゝゝ照時ハゝ重成ハ女婿ゝ後ゝ又重成ハ女婿ゝ。ゝ疎ゝ。

後ゝ一人ハ惜ゝゝ足ゝ。ゝ彼人禁獄ゝ。ゝ呵責ゝ。

宝式吐べ中こ死大事ふ及びなんみぐ〻深念しまへとのの時政沈吟じ曩ふ
刀野傳杖を濃の宿の対ふ内とく猛ふ彼処へさ〻向く見しそのとき安達藤
九郎に只顧ふ惹紛しく白旗左と幡太の前の命令をさきりしゑび幕下ハ渠が
女児ふる幡太の前の式免しく白旗左を赦しまうどこの旨をゆのえさせく
赦免状を賜り死ぬ時ふ及ぶ婦くくいそしく宿所へ退出つ竊ふ
ちん身ふ告しゑびちん方且く身思しく安達が女児幡太嬢ハ世ふ美人乃ぬえ
ぬり。と式りくそ初式時ゑ婦ふ世ふ美人乃ぬえ此彼と媒妁しくふ式ゑ
品をうへまく婚縁式いひ入れとうふ安達ハ一切義引をとこ互ゆ仮ようしとのふ
ぬうまふ蒲殿へ進ゑ世ゑり。かれが今この時をうく幡太の前を結果親乃
安達ふうれめ式ゑ世ゑく遺恨式ちびべ死乃式さでハ後才の傳杖をとて
うと彼処の対ふ清ゑうして遣しまふ甲斐ふる。ふ又計りまひ祐とかれ口

況ゑ見てくうち自措ゑを腹ゑしさものやませび老堂湯岩進しくたや
打立ち時照時を追懸させ。ゑび桟密を告計策を密せふ狐示させくその
夜安達ふ使者のろ兵ふ彼婦人を結果や宿怨式復世とゆひしそうこの先
めく照時ハ沈くふ證据を取ゑ見てく繹たや露顕ちゑりしゑび今さらふせんまべも
る。薄死式式踊つも。只成敗式時宜ふまろせんちん身ふ必ふよしのうまやと
問ハ胃根式ちち蛭車ゆ。さうとそもゑ式空しく傳杖ふ渫しあろせとハ後悔
ちくぞ侍うまび。ゑび子ゑびゑび式時ハ才長くる男児ハ相潭しくんゆうのとのふ
時政ちち忌既みびゑう式時を閑室ふ誘引ん親子頼式つ死合せ時政ハ
件の趣おちつのなく説示しく計畧と求しゑび式時ゆく嘆息し家ゑる大人ち
動されハ俄ニく事式対つて人を擇せのう祐ハかくる禍胎いで来ゑ曩ゆ當
麻を作勢りて當中ふ潜入せのひしくども某彼処ふさむゑうどハ當麻ち矢

庭に生捕られ鞫問せられなバその餘殃これが大人にまで及ぶべからん其ときに至らバ
故に當麻太郎に痍を負して當座に殺しておひし此度のはかりハそれにてもましまく。
輙く脱なべうもあらぬなりや。腹に脊ハ代がたし大の虫を助く
べくバ小の虫を殺せといへり。愚意なりのこときものと見えたる照時を指てよせ。
力士をもて是を刺せる彼らの密謀露顕のよしをいひちらすも手に傳へぬべく晩
途落のことをいひたん自殺してゆと幕下へ作のえあげなバ君ハさなこそあり。雖又
これが大人を疑ひ給ふとも安達が恨もおのづから解ざらんや。照時ハ罪
業つよく自殺せしと申すとも所領ハかへつてきと召放されるべく。これが大人私をその
子どもの為としもあらり杖ともなりて扶持して親が身にもとらる崇をうけて
これが家の係る難義を讓なる處それが徳に報ひなバ渠が子どもハとたへらの情
由を後にもしらずとも是を感じなくともよし只恭く思ふべし。これ彼小の虫を殺して大の
虫を助るなり。且照時ハこれが母の一族にいへバ不便に思召べくもなしと腹に背ハかへぬには
遑ミあらで及ぶべからぬことなりといへば牧の方ハ思ひもよらぬ艱みたりし笑ひ
向。されバとてもいかがなる謀あらん義時織手をかバ再度の難義を脱まぐくゑん疇
踏みたるべし。とて共に勧めしかバ時政ももと息つきて義時が計策をまべて
これが意に稱へり。さなきに彼傔杖ハこれが妻の従弟なりしかバさるよしのくらひ引
ぎるなし。かくて又再び何の議もあらん。足よし照時をのこらめ照時を召よせさせて
維にすらと傔杖をわりつる刺といつこと義時があくまで雉うたしと擇ばずとも
ゆるさじ。老黨湯嶋李進基勝ハ拳法相撲の技に長せり。十人がちからある
小ら匠と老當麻太郎とその師の共なりしか武藝を習ひ送ものなれど怒じと
勸るよりなるがいへり。是も件の密謀を漏るかぐ隠して我等のみしり究竟
のものなりとまをして耳語ハ時政まぐうち点頭ぬかのものをよう

その日ごろ妻ハ本工進ハ縁由を示しものゝ式時ハ人を走らしてく照時を召びいへあ
いそゝと焦燥ハ牧の方ハ基勝ハ説示んとて潛やうよ蒸襖と推開く出居の
かく人走ると去り式時ハ小棚なる料帝硯をとりあろしく遠しく墨揚たゞ
照時を招たよりまる書状を認めさる程よ通習某甲走り来て紙門の遠より
さ一敢死殿ゆ其処よりまもなくや刀野どの来ま世一と告る式ゆく時政を
奉とのひゝ式時ハ目を注しく分と起しもゝ風ハ吹よ世てくゆ召るゝく
こゝや来さり牧の方ハ基勝よかの幾を告し狡ひとほしのでくといひけて書院の
かゝ入走けば式時ハ書ゆ果ゆ書状を細ゆ引裂ゆ推固て袂入紛れ縁頼う
遣を出て客房のゝ入いゆ死ぬさる程よ刀野傭杖照時ハ両三日夜ゆ泊てく
執権の安否式問ゞその帰り式賠語んとて後者ハいと者器ゝとの死既よ
指来ると固より通家のこゆ一あるゝ後門より進ゝ入ると當番の若黨ハ

門ゆ出迎ハ客房へと誘引つ且とのよ式まうさんとて出居のゝ入退ハ門を
ちゞてくちてくゝ奥のゝより傭杖よくとそ来のひねさのゝ入りくゝ母よ
對面一ゆひねと問ゝる声ハまきくゝ式時ハ照時ハ阿と意あゝ腰刀を引提て
只ゝとゝ問ゝる方ゝと少く狼よゆひゞけちく左よゆ立てる金屏の背よゝ
當家の老黨湯崎基勝刀の下緒を裨ゆ一く袴の稜と高く取り蟲のごく
孤ゝゝく照時ゆ之と組む云狼藉や。と照時ハ振解んと身を反し既よ
利ゆを取ゝ引一ゝ。そゞ仆四ゆ合ゝ右ゞ一ゞ程ハ桃一ゞ抜ゆ力も
遥よゆ一ゝ居湯崎ハ仆ゝよ照時をつゝ引てく軟居処を摺仆一躰て脇ゆ
のゞ一懸てく短刀を引抜く頭式かんとする程よ反張ゆるどいふのゆやあ
けん忽地よ脇麻ゝて既よ刀をさ一ゝ引ゝ式ゝなゝをけるその隙よ照時ハ
伏つゆ腰刀を引抜く基勝ゞ太股ゝ殺ゝ小腹のゝ入まぐゞさと刺一反ゝきんと

父子相謀て頼時を刺む
頼時
刀野ノ傷杖船時
頼時の方
当麻大郎谷ヨリ入

をなかりけり。基勝ハかれ抵し。照時が既髭足を放さず刺りてまつふ引あげてやゝ
頸を掻てけるよ。されども刄ハ項よ及ばず照時ハ吼えつゝ起切付て即座に死し。
基勝ハ深痍によろりぬ照時ハたじろぐよ□小薙刀を突立て間ちかくまわりて
より時政ハ次の房よ□基勝が始終を見きゝたる。為体を闚窺て。せきと尤かくやせざりや
けるかくて弊果たりしか照時ハ甚く。近習のもの共召聚傔杖ハ乱心なりける
この處まで来り侍りて腰刀を引抜て。忽地に自殺しつ又湯崎基勝まで。かの
為体に驚劇抱え禁んとして。深痍と負ひぬ傔杖が従者の老さらちてあの
どもよこの趣が窺ふ告て主の死骸ひそかに見せよ。しかうしてきゝ劇騒ぐべからざ。
このあさろを召させよと叮嚀よ説示せられけるかりぬと。一両人外面へ走出ま
去則件の趣が刀野が従者に告しかバ衆皆呆れ惑ふのミ。固より主ハ梓家
通家なりしが疑ふと老されたる従者両三人許さるれて奥に入り。主の亡骸を

見たる程に照時ハ正首に彼が慰め喩せしかバ従者共ハ一議に及ばず。されども
かくても穏便のおん沙汰をとのミ希へバ照時ハのぞく夫ろなれバ亡骸を竹輿に
乗しめて第へ還りて営中へこの趣がみなあげよ。かくてさるほどの程なく
執事しかるべしやと諭されて額をつきいろいろ執事の庇護よ因りて孺子に家
督をゆるされバ数多の中の幸ひ仰よ従ひまつらんと勇みて主の亡骸を舁て竹
輿に扛乗せて衆皆宿所へかへりけるとぞ。この一條にかかづらひて深痍に悩しける湯
嶋を勤るものなりしかバ時政ハ叮嚀よこの苦痛を問慰め側つかへの者共が
ほとほと耳の傍より口と下の世没へなぞらへ照時を組伏さる速に刺殺さで痍を
負ながら匕首を取落さで自殺とつんきるふいとよし。といへバ有繋に憾りなん。
細やかに眼が睁て御旋でいへども某既に照時ぬしの頸が掻んとまへるより
背のさぐふ人ありて右の腕を礙と撲ぬ驚きて見かへれバ最異にうまく作乱て。

宮中ゆく自殺させ。當麻太郎武弘へとは怪しやとおりふしども煙の如くきえ
うせぬ。その撲ぎる処より。指の跡まぐ麻まく刃を引上げ逃げまど。
遂に下より刺れぬ。痍を負ひ後に臍の傍に舊のごくふるりしうべや彼人を
刺とゝのふ声は秋祐の虫の音よりも細く。その夜の霜と消てけり。
時政は當麻が寃魂基勝に祟るよう式ゆくさろに愉ゝび美時ゆのを
その式竊ゆ告ぐ。さそのゆ。かの折汝基勝を援きて無くゝ式ぐきべ。
可惜をのゝ式殺とまゞ式ゆ器械を食なぐゝ。いくづゆうちまゝ。
ゆふゝあるゆなやと問べ莞尓とうち笑ゝく。呼存なくてやいべ式。
この條の密計は基勝計り預ゝて渠腹心のものゝ人ども殺ゝ中とゝを
心るゝ。功に矜ゝく主を侮ゝ寵衰るべ竊ゆ恨ゝく。彼密謀式人に告ゝ式。この
折式ゆく基勝をゆ共に殺ゝ式ゝ。後中をゝゝなんこのゆゝ

某は式ゝ深痍を負ゝ。又基勝が目ゆ式ゝ。當麻太郎が寃魂は渠が命
数をゝ侵に及びく日来ゆ。ゝゝ式幻ゝ式のゝ見則迷ひ怪ゆ
ゝゝ。とその堂と拔尺ゞく。祥ゆ答まべ時政はゆゝまも小勝式鼓く感嘆ゝ汝は
智とゆひ量とゆひ親ゆは適優ゝまゝけゝ。宿願は汝が世ゝ。ゝゝ式成就せん。
努ゝ秘ゝと私語ぬ気ゝりさ式ゝ時政は刀野が死骸式かゝとゝ。沐浴ゝく
衣裳と更め宮中へ参る。猶ゝ又彼刀野が家臣ホは照時が一子ゝる太郎時夏が使者と
ゝく宮中へ糸上ゝ主の自殺式所ゝ。この日右幕下頼朝は稲毛三郎重成ゝく。
刀野照時をゝ召せゆひゝが政勢ゝ紛ゝ。彼人の逢糸式外のゝねべ安達藤九郎盛
長は鬱憤をゝるゝゝゆゝ。ゝゝ式て引ゝく来ゝんと必ゝ式私ゝ催促とゝ式
ゝゝゝねべ。公頻ゝ焦燥のゝ。その日も西へ没る比ゝ刀野太郎が所ゝ。勢槍時政も
ゝゝ。照時自殺の数式ゆえあげゝ。ゝゝゝべ幕下は廣元盛長ホを更ゆ公文

所に召集て件の旂を定め又時政廣元に範頼の遺物なる。ゆゑんの首級と彼朝臣の遺書をみせなどして幡太の前と安達が使敦俊が横死のよし照時が罪あるにぞ死罪の趣を告なバ。時政ハ今さらかく一言も答ずおのゝきして在又ならず驚き死かれバ儀杖照時ハ辞状をしとそ知て睨る路乃有死故に刃に伏しるものなるべし。盛長も愛女を殺させて遺恨せんとなりしかんばこれ私のこゝろのがら照時が罪ぬさなうるがくし渠蒲殿に宿怨ありや。又盛長に意趣あるまじく欲とまたかくまた御旋に背き罪なしきも理非正しげに断やせバ廣元霎時沈吟け。さらまとのへども分明ならぬ照時既に死しぬれバ罪科一等を宥らしさるべきのやと申けれバとりなく刀野太郎が使者よその夜廣通に殺したる兵卒の名を尋させ給へバ渠ハ照時が後才ゆゑく青日戸舟九郎綱道といふものなりかくさべ旦時夏にあかしまうするべき旨をいひそさせて。その使者を還しけれバ。幡太の方の首級をバ安達藤九郎にあづけて葬らせこれを葬らせ又舟九郎が首級をバ次の日由比濱に梟させて幡太の方を葬れとぞ。安達が怨を和解ん為に辞去の時政廣元ホが與る所ハ盛長へかへし返に。お伺せけるに制度に感佩して甘く領承致けり。盛長が為ろ元乃下に結なし。さる程に鎌倉殿のハさらぐ評議をかさ私させて刀野太郎時夏を下野へぞ流し給ふ。渠ハ年まだ十五に満ねど。その親の罪重ければかく所帯を没官して流罪に処られたるが。少年なれバ遠からぬ田舎に由縁ありてへと廣元執なしまうせしかバ許されけるとなるべし。さても件の時夏ハ今茲十三歳になん母親ハいぬる春罪を病て身まかりしかバ。その秋父ハ自殺しておのがうへのさへ罪被り毛の州へとて赴けバ。後類奴婢ハ離散して只乳母とのみ旅の空をたゞ還るよしもなけれど時政窮に至て杖助して外ながら

吳さんとて。腹心の家隷小各貴駿商しく走りけるが旅宿の却豊ゆく。賊人ゆへ似ざりけるを加以下野なる足利左馬攻義兼ゆへ時政が女婿なるを。豫て男の内意を受く件の少年を迎とり。いと懇ゆ曾待そり。この故ゆ時夏ハ鎌倉ゆあらゆハ方て物ゆとらとく。えらび出ハ源浪人なるゆ。方三町の宅地を構く。奴婢駿召使へ。そのさる郷士ゆ異ハ高くゆ足ゆ。しく。さろ儀アとく日毎ゆ近村を横行し。意ゆ放ち。狗と走らせ。猟山乱楽ゆとをなまじゆ。荘客ハ偏ゆ足利殿の客分とく。衆皆避くとなせしゆ。

時夏ハ右のごとく威勢あるゆ。恐ゆぞ挙動ゆ。

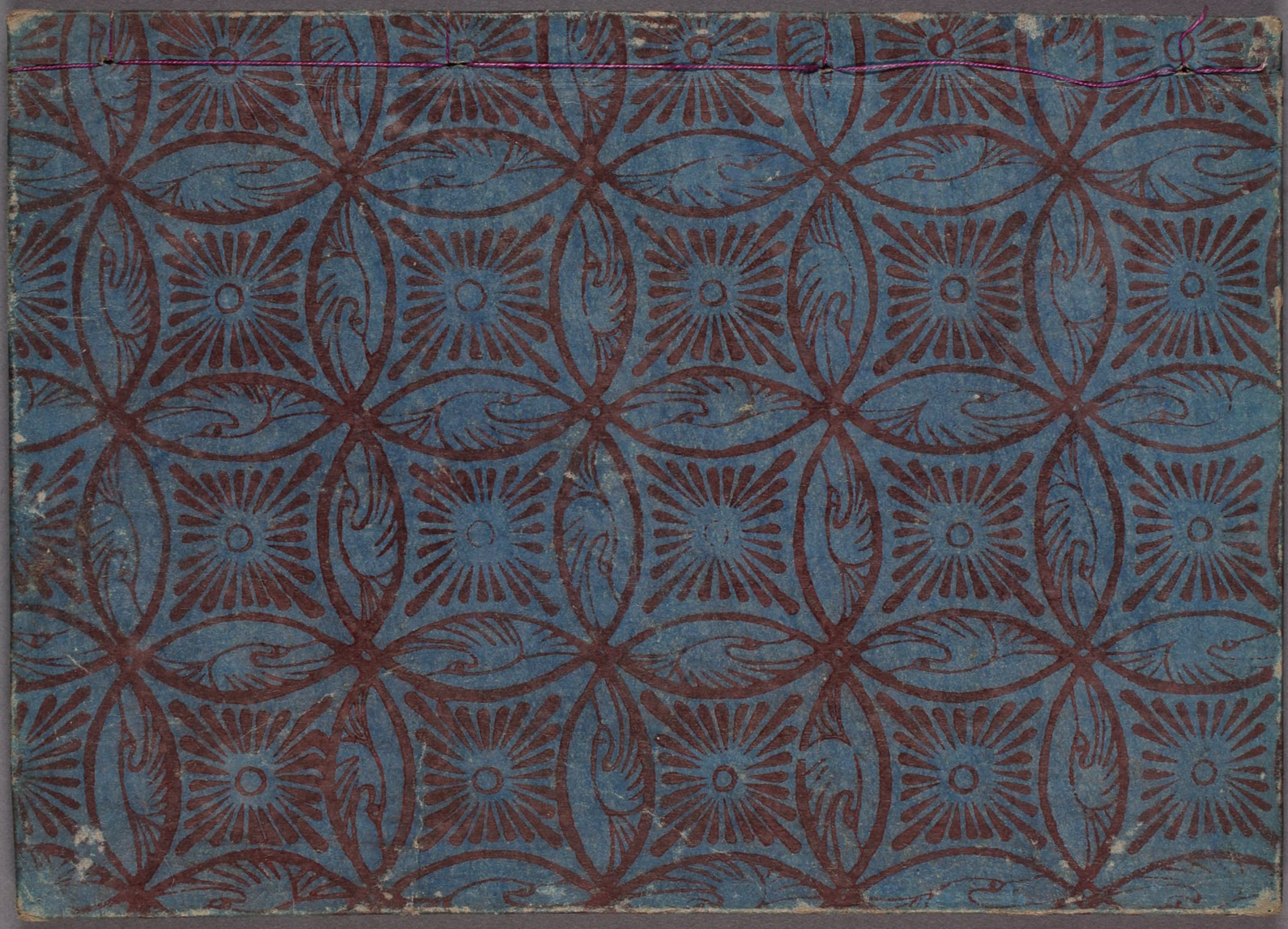
附ていゆ前ゆ出せる肖像のうち。吳時ゆ元勝と相撲をとるゆ至りしくうち。驚くゆ。像ゆあらゆせし。ゆ見画工の用心なるべし。閲者難じゆる

朝夷巡島記全傳巻之三　終

文樂館中　山ザワ小集　東浅原藤校　白紙摺明朝綴　物入全部四冊

題書詩選　岡崎慮門著　全仕立全三冊

書畫皆宜　美濃氏撰輯　白紙摺明朝綴　物入全部二冊

題畫詩聞　齊川竹遠著　一冊引文全一冊

書林　浪華心斎橋北詰西横　前川源七郎